7 月 11 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　19：　13 – 20

「お前たちは何者だ」

イエスは、聖書の中で最も大切なことは何かと問われて、次の二つを挙げられました。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」(マタイによる福音書 22:37)、「隣人を自分のように愛しなさい」(マタイによる福音書 22:39)。

イエスが私たちに命じておられることは多くありません。神を神として第一とすること。神の言葉を聞き、従っていくこと。隣人を愛すること。何度繰り返しても飽き足りないほど、イエスが求めておられることはシンプルです。

エレミヤの時代でもそれは変わりません。道＝生き方そのものを神の前に正すこと、神の前に義を行っていくことが求められています(「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行いを正せ。そうすれば、わたしはお前たちをこの所に住まわせる。」エレミヤ書 7:3)。

それが大切だと言うことは重々わかっています。しかし、私たちはつい安易な方向へと流れてしまいます。簡単でインスタントな救いを求め、自分自身のために恵みを独占しようとします。そればかりでなく、自分が賞賛を得るために神を利用しようとさえします(「ところが、各地を巡り歩くユダヤ人の祈祷師たちの中にも、悪霊どもに取りつかれている人々に向かい、試みに、主イエスの名を唱えて、『パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる』と言う者があった。」使徒言行録 19:13)。神の国の実現という真の目的を履き違え、地上での喜びだけを求めています。恵みを分かち合うことを二の次、三の次にしてしまいます。わかっていながら実践できません。

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。」(マタイによる福音書 7:21)

「そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ。』」(マタイによる福音書 7:23)

神はそのような私たちに忠告されます。悪霊でさえも、そのように取り繕う人間のことを見透かして、「お前たちは何者だ」と誰何します(「悪霊は彼らに言い返した。『イエスのことは知っている。パウロのこともよく知っている。だが、いったいお前たちは何者だ。』」使徒言行録 19:15)。何者でもないにもかかわらず、神を利用できると過信する人間を正そうとするのです。

形だけを取り繕うのではなく、真に神に立ち帰ること。改めて神の言葉に聞き、応えていくことが求められています(「あなたの掟を行うことに心を傾け／わたしはとこしえに従って行きます。」詩編 119:112)。そして、応えようと努力する人間を神が見捨てられることはありません。

だからこそ、その神の優しさに甘えるのではなく、「お前たちは何者だ」と聞かれたとき、「はい、あなたに従う者です」と力強く答えられる私たちでありたい。神である主を愛し、隣人を自分のように愛する私たちでありたい。心からそう願うのです。